

「よのなか教室」の趣旨と経緯について

2014年9月

1. 2013年8月に「日向市キャリア教育支援センター」が開所しスタートしました。
その後、「日向市キャリア教育推進懇話会」において、学校と産業界ならびに行政等あげて問題や課題の研究・協議を重ねてきました。
これらの検討の結果、「日向の子供たちの未来づくりプロジェクト」として、次の二つの視点で取り組むことになりました。
 - (1) 学校で、子供たちの学ぶ意欲を高め、将来を考えさせ、「学力」と「生きる力」を向上させる。
キャリア教育は、教科指導や生活指導など学校教育そのものであり、学校（先生方）がその主役、企業（産業人）はその強力な支え役である。
 - (2) 働く大人が、子供たちに語る「日向の大人はみな子供たちの先生」運動を起こす。
子供たちに、「社会」を考えさせるには、産業界の力が不可欠であり、不可避である。
この活動の愛称を、「よのなか教室」とネーミングし、広く浸透を図る。
2. 「日向の大人はみな子供たちの先生」を合言葉にして、働く大人が子供たちに語る場を設ける運動の趣旨は、次のような問題認識をふまえています。
 - (1) 「将来、どう生きるか」を考えることを先送りする高校生や大学生が多いという指摘があります。その結果、大学卒業後も約1/4が就職も進学もしておらず、就職しても3年以内に3割（宮崎は4割）が離職しているという事実があります。
これは、中学から高校普通科に漫然と進学し、高校から大学に漫然と進学していることが、ひとつの大きな原因であると考えられます。
そのために、将来どう生きるかを、中学生の時に教え、考えさせ、悩ませることが重要であると考えました。
 - (2) 日向の子供たちの学力を向上させたいという強い思いがあります。
そのためには、まず子供たちの学ぶ意欲を高める必要があります。
何のために学ぶのかを考えるには、何のために働くのかを考えさせることが必須です。そして、働く意味を教えることは、学校の先生だけでは不十分です。
そこで、実際に社会で働いている多様な大人が、学校に出向き、子供たちに直接語りかける場をつくるが必要だと考えました。
 - (3) 現在、有能な若者たちが、日向から流出し続けているという指摘があります。
若者を日向に呼び戻していくための施策のひとつとして、地元企業の魅力を子どもたちに最大限に伝えていく工夫をして、子供たちの発達段階に応じて、繰り返し繰り返し伝える努力をしていくことが必要だと考えました。
3. 「よのなか教室」の話し手（講師）にお願いしたいことは次の通りです。
 - ・「仕事の紹介」と「働く喜びと苦労」などを子供たちに、本気で語っていただきます。
 - ・日向で働くすべての大人の方々に参画いただけるのが願いです。
新人も、中堅の人も、管理職の方も、社長さんも、お店等を経営されている方も、農林水産業の方も、仕事をリタイアした高齢者の方も・・・すべての大人が子供たちに関わっていただきたいと願っています。

以 上

「よのなか教室」運営要領について

2014年9月

日向市キャリア教育支援センター

1. 年間計画の策定について

- 1) キャリア教育年間計画に基き、「教科」「道徳」「学活」「総合」・・・などすべての学級活動の中で、具体的に「キャリア教育の視点で実践すること」を「見える化」することが最も肝要である。
その中で、「よのなか教室」を活用して実施したい内容を明確にする。
- 2) 上記にかかわらず、当面はとりあえず「よのなか教室」を活用した授業を実施したいという計画があれば併行して実施することとする。
(この場合もできるだけ年間の流れや、他の活動との関連等を明らかにしていく)

2. 事前打合せについて

- 1) 日程調整と打合せ場所
 - ・当面は、事前にコーディネーターにて日程・場所等を調整して、話し手（講師）と学校（先生）とコーディネーターで打合せを行う。
(打合せにコーディネーターが参加できない場合は、先生と講師の二者で打合せする)
 - ・回を重ねることによって、先生と講師とのコンタクトができるようになると思われるので
今後は、先生から直接講師と連絡をとって依頼や打合せ等ができることをめざす。
 - ・打合せの場所は、話し手（講師）の職場（もしくは講師指定の場所）とする。
(先生に講師の職場に出向いていただきそこで打合せすることが極めて有意義である)
- 2) 先生から講師にお話しいただきたいこと
 - ・学校で実施しているキャリア教育の内容について（年間計画など）。
 - ・その中で、今回の「よのなか教室」は、どういう位置付けになるのか。
 - ・今回の「よのなか教室」で、子供たちに伝えてほしいことは何か。
- 3) 話し手（講師）から先生がお聞きしていただきたいこと
 - ・子供たちに伝えたいと考えておられるご自身の経験や思いについて
 - ・学校への要望など
- 4) 当日のすすめ方などについて
 - ・話す時間は、何分位にするのか
 - ・子供たちからの質問と応答は、何分位にするのか
 - ・先生にファシリテート（司会進行）してもらってすすめる形にするかどうか
 - ・当日、学校で準備するものは何か
(パソコン、プロジェクター、スクリーン、コピー資料・・・など)
- 5) 来校の手順について
 - ・授業開始時刻のできれば30分位前に学校に来ていただくこと。
学校の玄関に「受付」があるので、そこで「よのなか教室」の講師として来た旨を伝えていただければご案内させていただくことを、講師に事前に伝える。
 - ・講師用の駐車場を確保し、講師には具体的にどのように来て駐車していただければいいか具体的にお伝えする。

3. 当日の授業について

- ・担当の先生と、教室現場の確認や使用する器材の確認などを行っていただく。
- ・授業の最初に、先生から今回の「よのなか教室」の趣旨や期待ならびに講師紹介をしていただく。
- ・できるだけ子供たちとの質疑応答の時間を設けていただくこととし、司会進行（ファシリテート）は、先生にさせていただく。
- ・授業終了後は、先生も次の授業など予定が入っている場合が多いので、様子をみて学校からお帰りいただく。
(授業終了後のお見送りができない場合は、その旨事前によく講師にお伝えしておく)

4. 事後フォローについて

- ・子供たちには、感想文を記してもらい、完成次第できるだけ早く、学校（先生）から話し手（講師）とコーディネーターにコピーを送付いただく（郵送またはEメールで）
- ・コーディネーターから話し手（講師）に連絡を取り御礼を伝えるとともに、感想文についての所感、授業を終えての感想や意見、要改善点などについて意見交換を行う。
- ・これらの意見・提言などはその都度書面にまとめ支援センターで共有する。

5. 報酬ならびに交通費について

- ・下記の通りの取り扱いとする。
「報酬ならびに交通費は、ボランティアということで、ございませんので何卒ご理解ご協力を賜りますようお願い致します。

以 上



多彩な顔ぶれの話し手たち。一人ずつ自己紹介し、思いを語った（日向商工会議所）

日向市

キャリア教育「よのなか教室」

9月スタート 話し手64人に委嘱状

「日向の大人はみな子供たちの先生」運動を起こし、地域の大人みんなで自立した社会人や職業人を育てようと、日向市キャリア教育支援センター（水永正憲センター長）は9月から、学校現場で取り組むキャリア教育の話し手（講師）に地域の大人を派遣する「よのなか教室」をスタートさせる。これを前にこのほど、話し手として参加する地域の大人64人に委嘱状を交付した。

話し手として参加するのは同市、延岡市、門川町の企業・団体などに勤めている、もしくは勤めた経験のある20～80歳代の大人たち。

水永センター長は「子どもたちの未来は大きな可能性に満ちている。子どもたちには多様な生き方を目指してほしい。地域に暮らす全ての大人たち、子どもたちに関わる何らかの役割を担ってもらえるのなら、日向市は日本一すばらしい町になると信じている」と期待を込めた。

話し手の職種は看護師、塾講師、保育士、管理栄養士、新聞記者、一級建築士、自動車販売業、清掃業、リサイクル業、非鉄金属・金属製品製造

業、建設業などさまざま。一人ずつ自己紹介し「私のづくりへの興味を引き出した」「あいさつや礼儀の大切さを伝えたい」「自然を愛する心を伝えたい」「地元で働く楽しさを感じてもらいたい」など、子供たちへの思いを語った。

任期は同日から平成28年3月末まで。「よのなか教室」スタート後は、各学校のニーズに合わせて、同市教育委員会と同センターで調整、それぞれの話し手につないでいく。同センターは昨年8月、地域の商工会議所と連携し、調整役となるコーディネーターを配置する県内初の試みとして日向商工会議所に開所した。県全体のキャリア教育のけん引役として期待されている。問い合わせは同センター（☎日向57・35522）。

大王谷学園
初等部

古里と英語の魅力紹介 よのなか教室で市民講師



藤江さん（右端）の話に聞き入る子どもたち

日向市の大王谷学園（橋本慎朗校長、993人）初等部で16日、同市内で語学学校を主宰する藤江幸子さん（43）が授業を行った。同市のキャリア教育支援センターが、今月から始めた市民講師派遣事業

「よのなか教室」の一環。バイタリティーあふれる藤江さんの体験談や古里への思いなどを、5年生114人が聞き入った。
藤江さんは同市出身。地域の人たちとの交流が盛んだった。

た幼少時代から海外に飛び出し、現在の仕事に就くまでをクイズや写真を使って楽しく授業し、英語を学ぶ喜びや大切さも語った。

この中で、ケニアで暮らした体験について「青空が広がっていて人が優しい、日向に似ている」と紹介。「ただ、ケニアの子どもたちは普通に学校に行けるわけじゃない。

みんなが元気に学校に通えることは本当に素晴らしいこと」と続けた。

また、英語を習得することで広がる世界があることを話し「日向から世界に発信していけるような人を育てたい」と思っている。日向に住む一人のおばちゃんとしてみんなを応援しています」と語り掛けた。

話を聞いた都甲光琴さん（11）は「英語の授業をもっと頑張りたい」と話した。

「よのなか教室」には、さまざまな職種の市民約70人が講師として登録しており、学校の要望に応じて派遣できるシステムになっている。